



駄菓子ボランティアとして、クッキー作りを手伝う71歳の沼崎文子さん(左)

地域を創る 別 ゆうゆうの挑戦

ボランティア

支え支えられ 区別なく

「町を歩いていると、声を掛けられることが多くなったのがうれしい」

石狩管内当別町の沼崎文子さん(71)は、障害者が働く町内の喫茶店「オープンサロン・ガーデン」で月2回、「駄菓子ボランティア」を務める。65歳以上の町民22人が登録し、店に置いてある駄菓子の整理などをして

いる。

「町を歩いていると、声を掛けられることが多くなったのがうれしい」

■障害者に働く場

ガーデンは町内の社会福祉法人ゆうゆうが2008年に開設。喫茶、手作りドーナツなどの販売、駄菓子店の三つの機能があり、障害者6人が働いている。障害者に働く場を提供するのが第一の目的だが、それだけでは

「土日に鍵を貸してくれば、俺たちでやるよ」

町内会長や住民20人で構成するべこちゃんは、レストランが休みになる週末に、住民が集う催しを提案。併設する農園での種まきや収穫祭、夏祭りなどを企画してきた。

■定年後の居場所

五賀利雄会長(77)は「イベント準備のためにレストランには何度も足を運ぶ。定年後に居場所があるというのは幸せなこと」と強調する。

メンバーの平野笑子さん(65)は週に1〜3回、ふらりとレストランに立ち寄り

る。農園で畑作業をするついでに、障害者たちとの会話を楽しむ。「みんな優しいから、ここに寄るのが楽しくて、楽しくて」

近くに住む認知症の高齢者が、障害者に農作業を教えることもある。支えられているはずの障害者が、いつの間にか高齢者たちの生きがいになっている。ゆうゆうの取り組みに注目している東京在住の福祉ジャーナリスト町永俊雄さん(66)は元NHKアナウンサー。こう説明する。「支援する、支えられるの区別をなくし、みんな一緒に地域をつくっていく。当たり前のことをごく自然に実践しているのが、ゆうゆうの新しさだ」

発信